

とにかく仁淀川には近づかないでいただきたい。特に町内全域が震源域なので、堤防がすべて大丈夫というわけではない。そして、念のため高いところに避難をお願いしたい。

被災地を視察していて非常に心強かったのは、10万人の自衛隊員。毎日ヘリコプターが被災地を飛んでいる。上空にメッセージを送るということが吾北・本川地区といった山間部では、非常に重要になってくる。

情報通信の手段として、また支援物資、薬など、そして医師・看護師をおろすDMA Tが重要になってくる。自衛隊だけではなく、米軍のヘリとの連携も出てくる。

また東日本では、県庁の仙台、福島、盛岡は内陸にあり、中枢は生き残った。西南日本は県庁所在地が海側にあり、日本だけでは対応できない。

特に高知は県庁所在地が浸水域のご真ん中。人が集まることも難しい。県庁は臨時の役所を決めておく時期となっている。あらかじめ臨時庁舎に緊急資機材を準備しておく

必要がある。

国の防災基本計画で想定していないことが今回起こった。南三陸町、気仙沼もそうですが、市町村の機能がなくなるということ。これは全然想定していなかった。

仮に、いの町に国の役人が来た場合どうするか、分かる訳がない。地元のことが一つも分からない。これをどうするかということを含めて今議論しています。

また、4月22日、中央防災会議の1回目の会合で、最初の5分間、各委員がスピーチしたのですが、釜石市長のスピーチは非常に印象に残った。私の隣の席でしたが、最初に「釜石の町は消えました。」しかし、ただ一つだけ希望がある。全部小学校、中学校、高校を35mの高台に作った。6時間目が始まった時間に学校に残った子どもたちは一人も死ななかった。その彼らが今後5年後、10年後、町を立て直してくれる。そう信じていますし、それが唯一の希望です。」と涙ながらおっしゃいました。そして我々に向かって「地

震がどう起こるかを数字で言うのではなく、研究者も学者さんも人の心が分かる人たちになってください。」とおっしゃられました。

同じ会ですが、平野復興大臣が、最初の会で気象庁に対して、何故最初にM7.9と言ってしまったのかと問いたえました。

消防団の方は、分かるんですよね。M7.9なら津波は3m程度ということで、屯所に集まったり、水門を閉めに行ったり。けど結果的に巨大津波には全然意味はなかった。ハードの限界を覚えておかなくてはいけない。

消防団の方は自分たちの町を守るという使命感がありますので、難しい問題ですが、水門を閉めに行った方が亡くなった、こういったことを美談にはしていない。

大事なのは自分の判断。想像できるか？最初に逃げた人は2分半の揺れは尋常ではないと逃げています。役場が放送してくれるだろう、NHKが言うってくれるだろうと待っていてはダメです。自分で判断する。それが重要です。

最新の木造家屋は4mの津波にも耐える。そういった面でも耐震診断、耐震改修が重要になってくる。

一番良いのは、農作業をしているとき。何も落ちてこないからです。人は家がつぶれるから死ぬのですから、いい加減においたタンスがあなたたちの命を狙っているのです。

被災地で現地調査していて、墓石が倒れていない。こんな地震は初めて見ました。小刻みな揺れで墓石が回っている。

また、地震の揺れで倒壊した家屋を500kmで一軒も見なかった。

これは、東日本大震災では、震源域がほとんど海側であつたためです。

しかし、我々の地震は真下ですからこうではない。

いの町（伊野地区）については、土地条件図を見ていただくと、後背低地ですが、2mくらい掘ると水が出てくるか、豆腐みたいな状態で揺れが1.65倍に増幅されますので震度7を考慮しておいたほうがいいです。

液状化はゆっくり進行する

から液状化で人が死ぬことはない。問題は家がつぶれて人が死んでしまうこと。

しっかりした家であれば、基礎ごとジャッキアップして、また住むことも可能なんです。

また山間部においては、がけ崩れなどの土砂災害もありますが、自然はなだらかになろうとしているところに、人間が、崖を作り、道を作っているのです。しかし、日本という国はそうしないと成り立たない面もあります。

南海地震、過去400年はすべて冬場に来ている。出水期の地震で、ゆるんだ斜面が崩壊する恐れ、また土砂ダムができる恐れは十分あります。

（参加者の質問にお答えいただき講演会終了。）



1月24日 吾北中央公民館